

(28) ゴボウ  
ア 級菌剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	F R A C コード	適 用 病 害 虫 名								注 意 事 項
				う ど ん こ 病	菌 核	黒 あ ざ 細 菌	黒 斑	黒 斑	黒 斑	黒 斑	黒 斑	
オーソサイド水和剤 80	キャブタン	その他	M04				◎					
カスミンボルドー	カスミン・塩基性塩化銅	混合剤	24・M01			◎						
ダコニール 1000	TPN	その他	M05	◎								
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	SBI	3	◎								
ハーモメイト水溶剤	炭酸水素ナトリウム	無機殺菌	NC	野								野:【野菜類登録】
フジドールフロアブル	塩基性硫酸銅	有機銅	M01			◎						
ユニフォーム粒剤	アツキシストビン・メタラキルM	混合剤	11・4		◎							
リゾレックス粉剤	トルクロホスマチル	有機リン	14		◎							
ロブラー水和剤	イブゾン	ジカルボキシド	2	◎								
Zボルドー	塩基性硫酸銅	無機殺菌	M01			野						野:【野菜類登録】

(28) ゴボウ  
イ 殺虫剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名								注 意 事 項	
				ア ブ ラ ム シ 類	ヒ ヨ ウ タ ン ゾ ウ ム シ 類	ゾ ウ ム シ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ュ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ュ ウ 類	ネ キ リ ム シ ト ウ 類	ハ ス モ ン ヨ ト ウ 類			
ア グ ロ ス リ ン 乳 剤	シペルメトリル	ビレスロイト <sup>®</sup>	3A	◎	◎								
ア ク セ ル フ ロ ア ブ ル	メタフルミゾン	その他	22B		◎					◎			
ア デ イ オ ン 乳 剤	ペルメトリル	ビレスロイト <sup>®</sup>	3A	◎									
ア ド マ イ ャ ー 1 粒 剤	イミダクロブリド <sup>®</sup>	オニコチノイト <sup>®</sup>	4A	◎									
ア ド マ イ ャ ー フ ロ ア ブ ル	イミダクロブリド <sup>®</sup>	オニコチノイト <sup>®</sup>	4A	◎									
エ ル サ ン 乳 剤	PAP	有機リン	1B	◎									
オ ル ト ラ ン 水 和 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎									
オ ル ト ラ ン 粒 剤	アセフェート	有機リン	1B	◎									
ガ 一 ド ベ イ ト A	ペルメトリル	ビレスロイト <sup>®</sup>	3A						◎				
ス ミ チ オ ン 乳 剤	MEP	有機リン	1B	◎									
ダ イ ア ジ ノ ン 粒 剤 5	ダーアジノン	有機リン	1B						◎				
ト ク チ オ ン 細 粒 剤 F	プロチオホス	有機リン	1B		◎				◎				
ネ キ リ エ ー ス K	イソキサチオン	有機リン	1B						◎				
ネ マ ク リ ー ン 粒 剤	フルオピラム	アミド <sup>®</sup>					◎	◎					
ビ ー ラ ム 粒 剤													
ネ マ ト リ ン エ ー ス 粒 剤	ホスチアセート	殺線虫	1B				◎	◎					
ノ ー モ ル ト 乳 剤	テフルベンズロン	IGR	15			◎							
バ イ デ ー ト L 粒 剤	オキサミル	カーバメート	1A				◎	◎					
フ ェ ニ ッ ク ス 頸 粒 水 和 剤	フルベンジアミド <sup>®</sup>	ジアミド <sup>®</sup>	28						◎				
フ ォ 一 ス 粒 剤	テフルトリル	ビレスロイト <sup>®</sup>	3A						◎				
マ ラ ソ ン 乳 剤	マラソン	有機リン	1B	◎									
ラ グ ビ ー M C 粒 剤	カズサホス	殺線虫	1B				◎						

(28) ゴボウ  
ウ 土壌消毒剤

農 薬 名	成 分 名	R A C コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項
			ケ ラ 類	ネ キ リ ム シ 類	コ ガ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	萎 凋 病 病	黒 あ ざ 病		
ガスターード微粒剤 バスアミド微粒剤	ダゾメット	I:8F							◎	◎			
キルペー一カーバムナトリウム塩		I:8F						◎					
クロールピクリン	クロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎	◎				◎			
クロピク80 ドジヨウピクリン ドロクロロール	クロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎	◎				◎			
クロルピクリン錠剤	クロルピクリン	I:8B					◎			◎			
ソイリーン	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎	◎			
ダブルストップ	クロルピクリン・D-D	I:8B・8A						◎	◎	◎	◎		
テロ油 D C 剤 D — D	ン D-D	I:8A		◎			◎	◎					

## 工 病害虫防除法（ゴボウ）

### （ア）うどんこ病 *Sphaerotheca fuliginea*

#### （防除のねらい）

病原菌には6群の寄生性に違いがあり、ゴボウを侵す系統はゴボウとコスモスに強い病原性を示し、ウリ類とアズキには弱い病原性を示すゴボウ型に属するので、これらに注意して防除を行う。夏季高温時、風通しの悪い時ほど下葉から発病するので、この頃の防除を徹底する。

#### （耕種的防除法）

過度の密植を避ける。

### （イ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

#### （防除のねらい）

病原菌は被害葉に形成された菌核で土壤中に生存し、子のう盤を生じて子のう胞子を飛散して伝染する。春秋の気温14°C前後で降雨が続くと、子のう胞子が飛散し感染に好適な条件となるため、本病の発生が多くなる。本菌の生育適温は25°Cで、ゴボウ以外にナス科、ウリ科、アブラナ科野菜など多くの植物に寄生する。防除は早期発見に努め、発病株は早期に除去するなどして、ほ場衛生管理に努め、トンネル栽培は十分に換気を実施し、不織布等で被覆して多湿となる場合には予防散布を行う。

#### （耕種的防除法）

- (1) 被害茎葉上の菌核は伝染源となるので、枯死葉は除去し、ほ場外で土中深く埋めるなど適正に処分する。
- (2) トンネル内の換気を十分行う。
- (3) 夏季湛水処理を行う。
- (4) 深耕、反転耕を行い、5cm以上の深さに菌核を埋没させ、子のう盤の形成を抑える。

### （ウ）黒あざ病 *Rhizoctonia solani*

#### （防除のねらい）

病原菌は土壤中または被害組織上の菌核、菌糸塊、厚壁化細胞の形で越年し、土壤伝染する。15°C以上、特に25°C～30°Cの高温で多湿な時に発生しやすい。

#### （耕種的防除法）

- (1) 発病ほ場ではイネ科作物を栽培し、ゴボウは3作以上休作する。
- (2) 春播き栽培は早播きせず、秋播き栽培では遅掘りを避ける。
- (3) 低湿地への作付けは避け、土壤pHは5.5～6.0(KCL)に矯正する。
- (4) 被害残渣はほ場に埋めず、外に持ち出して焼却する。

### （エ）黒斑細菌病 *Xanthomonas campestris* pv. *nigromaculans*

#### （防除のねらい）

被害組織で越年するとともに種子伝染も考えられる。露地栽培では冬季を除きすべての時期に発生するが、トンネル栽培では冬季にも発生がみられる。幼苗期に雨が続くと多発し、6～7月の長雨は病勢進展を助長する。秋播きは春播きより早くから発生する。

#### （耕種的防除法）

- (1) 発病葉を除去・焼却する。
- (2) 輪作を行う。
- (3) 排水を良くする。

### （オ）黒斑病 *Ascochyta phaseolorum*

#### （防除のねらい）

病原菌は病葉で越冬し、翌年の伝染源となる。秋季に発生が多く、生育初期に発生するほど被害が大きくなるので、生育初期に重点をおいて防除する。

#### （耕種的防除法）

- (1) 秋季の生育が旺盛になるよう管理する。
- (2) 表土を反転する。
- (3) 収穫後は被害植物の処分をする。

(カ) 根腐病 *Pythium irregularare*

(防除のねらい)

土壤伝染性病害で高温時期に播種するほど発生が多い。降雨が続くと多発傾向にある。本病はピシウム属菌であるが、「ヤケ症」と呼ばれるものには本菌のほか、リゾクトニア属菌、フザリウム属菌、ネグサレセンチュウ等も関連していることがあり、対策は総合的に考える必要がある。土壤消毒はこれらの問題の解決策として最も有効である。

(耕種的防除法)

- (1) 多発ほ場での連作を避ける。
- (2) 排水良好なほ場で栽培する。
- (3) 石灰を施用する。

(キ) 角斑病 *Cercospora arcti - ambrosiae*

(防除のねらい)

病原菌は病葉で越冬し、翌年の伝染源となる。秋季に比較的古い葉または生育不良株に発生しやすい。

(耕種的防除法)

秋播きは10月20日以降に播種する。

(ク) 紫紋羽病 *Helicobasidium mompa*

(防除のねらい)

病原菌は土壤中に長期間生存し、イネ科作物を除く多くの作物を侵す多犯性病害である。発病ほ場では連作を避けるか、土壤消毒をする。

(耕種的防除法)

- (1) 被害植物は早めに持ち出し処分する。
- (2) 消石灰を多量(300kg以上)に施す。
- (3) イネ科作物と4～5年輪作する。

(ケ) アブラムシ類

(防除のねらい)

ゴボウの他キク科植物の若芽での寄生が多い。5月上旬頃から寄生し始め、6月下旬頃が最も多くなる。秋季に多発することもある。加害によって葉が巻かないうちに防除する。

(コ) ネキリムシ類

(防除のねらい)

ハクサイの項参照

(サ) ハイイロサビヒヨウタンゾウムシ

(防除のねらい)

成虫で前年の春播きほ場の土壤中、あるいは周辺の畦畔で越冬し、3月下旬～4月上旬に越冬成虫が出現する。成虫は4～6月まで見られるが、4月下旬～5月上旬に最も多く、この時期を中心で防除する。ゴボウ以外のヨモギなど雑草でも生息するので、周辺の畦畔や雑草地を含めた防除が望ましい。

(耕種的防除法)

- (1) 秋播きゴボウは早めに掘り取る。
- (2) 連作を避ける。

(シ) ゴボウネモグリバエ

(防除のねらい)

幼虫態でゴボウの根に食入したまま越冬し、3月に蛹化、成虫は4～11月まで見られる。第1回成虫は4月中～下旬、第2回成虫は6月中旬、第3回成虫は7月下旬で以降継続発生する。

(耕種的防除法)

- (1) 秋播きは10月20日以降に播種する。
- (2) 被害株はほ場外へ持ち出し、処分する。

(ス) センチュウ類

(防除のねらい)

根にこぶを作るネコブセンチュウ類と「やけ」症の原因になるネグサレセンチュウ類がある。殺センチュウ剤で防除する。キュウリのネコブセンチュウの項参照。

(セ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

ハクサイの項参照。